

**【今週の暗唱聖句】 人は自分の道はみな正しいと思う。しかし主は人の心の値うちをはかられる。**

箴言21:2 以下、CS成長センター「成長4. 5. 6月号」p56より引用

●クリスチャンの生き方にはいわば自己流と聖書流の二つの在り方が見受けられる。●自己流のクリスチャンは聖書を読んではいるが、聖書の言葉に従おうとしない。判断や決断が必要とされるところは常に、聖書のことばよりも自分の考えを優先してしまう。こういう自己流のクリスチャンは、やがて聖書の考えがどんなにはっきりと示されても、まったく意に介さない。霊的な感覚が鈍くなり、神の御心をわきまえ知ることができない。自分が正しいと思うこ

とが聖書の語っていることであるという大変な勘違いをするようになる。●一方、聖書流クリスチャンは、判断や決断が必要とされるところにおいて、常に、自分の判断や考えを聖書のことばで吟味する。よく祈り、神のみこころとするとところを見きわめようとする。そして聖書のことばに自分を従わせようとし、聖書的な歩みをすることを喜ぶのである。●自己流か聖書流か。私たちはどのような姿勢と態度で神にむかっているかを考えたい。

【先週のMESSAGEより】 最初の罪 創世記3章

●善悪の知識の木の存在／神はなぜこの木を園の中央においたのか、と誰でも思うものである。神が人に自由意志を与えたその時から「どうしても存在してしまう木」というのが答えとなろう。人格と人格は言葉による約束で結ばれる。人間は意識しようとしまいと数えきれない約束を守りながら生きているが、約束を破れば信頼は失われ、人格関係が破壊される。この木はつまり神との信頼関係の象徴であったのだ。●蛇の存在／聖書は何の断りもなく悪魔／蛇を3章に登場させる。サタンの起源は興味のつきないテーマかもしれないが、最も大切なことはサタンの存在が事実であり、戦わなければならない現実であるということである。私たちは人類とサタンとの戦争のただ中に生まれてきたのである。●サタンの目的は最初から「信頼関係の破壊」にあった／サタンの誘惑の手口は今も昔も変わらない。先ず神は私たちの幸せを願わず、私たちから楽しみを奪っていると思わせ、神の愛に疑いを抱かせる。次に神の命令をうとましいものと感じさせて命令を破らせようと誘惑するのである。●誘惑そのものは罪ではない／約束を破り人格関係を壊す誘惑は自由意志が存在する限り常に存在する。私たちはしばしば誘惑を感じることも自体に罪悪感を感じるが、誘惑を感じることも自体はまだ罪になっていないことを覚えたい（罪を犯している状態を夢想し続けることは罪ではある）。●どうやって誘惑、罪、死の連鎖から自由になるか／蛇に対する宣告の中に既に解決が示されたが、聖書全体がこの問いの答えになっている。■

【この教会のビジョン (6)】



※ 短期滞在者、永住者共に愛の絆の中で教会を形成し、
靈的、**経済的に自立した教会**となることを目指す。

●聖書の原則はどこまでも「働かざる者、食うべからず」第二テサロニケ3:10、「自分で得たパンを食べなさい」3:12でありこれは教会にも当てはまる。教会における「経済的自立」とは外部からの支援や援助無しに自立した活動を行うことが出来ることを意味する。自前の建物を持つか否かは迫害の有無、教会の成長段階等、様々な要因で決まるが、教会が「聖書の御言葉」の上に建てられている以上、聖書を教え、群を導く伝道者／教師／牧師が必要となる。それゆえに多くの場合、経済的自立とは教職者をサポートすることができる、という意味に使われる。使徒パウロは教会が小さく献金だけでは生活出来なかった時、生業のテント作り（アルバイト）をしながら宣教活動を行ったが、必要が満たされたらすぐにフルタイムに移行した。それだけ、フルタイムには価値があるということなのである。

●私たちの教会の場合、前任の近藤先生は最初6年で自立教会を設立することを目標にされたが、ニューヨーク地域の流動の激しさやバブル経済の崩壊後でもあり、その目標は未達成となった。その後「たんぼば伝道」の方針を切り替え、やがて帰国する一人一人をきちんと訓練し、日本の教会に送り返すことを第一目標とすることにした。以降、当面日本から派遣されてくる宣教師が働きの中枢を担うというスタイルになっている。3～4年でメンバーが8割方入れ替わる状況ではどうしても教会として積み上げができないため、今後もこの状況が続けば、宣教師主導体制を継続せざるを得ないが、永住メンバーが過半数になり、全体の人数が恵みのうちに増やされていくようになったなら、経済的自立を考えることは自然であり、教会が成長するためにも必要となる。心に留めておきたい。

【今週の英語】

Sorry seems to be The Hardest Word 「ご免なさいの一言がもっともむずかしい」という言葉がある。有名なエルトン・ジョン／バーニー・タウピンの曲のタイトルであるが、真理の一端をついている。一步踏み出して、謝罪をしようとするときに必要となるのが、**SWALLOW Your Pride** 「プライドを飲み込む」ことである。日常会話でもよく使われる言葉であるが、自尊心が邪魔して必要な行動がとれなくなった時に、思い出したい。もし自尊心に支配されてしまうと、人間は自己正当化の道にはまり、**IT isn't MY FAULT** 「私のせいじゃない」と言い始め、自分で自分をあざむくようになるのだ。白を黒、黒を白と言って、自らをあざむくならその人の心は確実に壊れ始める。当然まわりの環境もどんどん不利に回転し始め、ダチョウのように、**Hide one's head in the SAND** 「砂に頭を突っ込」んで現実逃避するようになってしまうのだ。 ■